敦煌禪宗文獻分類目録

田中良昭
程　　正

〔略號〕追加分
Ch＝ベルリン、ドイツ國立圖書館所藏、ベルリン・トルファン・コレクションの漢文文獻
上圖＝上海、上海圖書館所藏、敦煌漢文文獻

〔略稱〕追加分
〈編著類〉
・方廣錩編『藏外佛教文獻』13～15（北京，中國人民大學出版社，2010）
→『方・藏外』13～15

〈雜誌類〉
・『佛教文化研究所紀要』　→『佛文研紀要』

Ⅱ語録類(2)

7．請二和上答禪策十道

①S4113

〔テキストの飜刻・校定〕
①田中良昭「敦煌出土『請二和上答禪策十道』について」（『宗教研究』223,1975,pp.72-84）→『田中敦煌』（pp.265-273）
①田中良昭「敦煌出土「請二和上答禪策十道」について」（『佛教史學論文集（曉城趙明基博士追慕）』1988,pp.175-184）

〔著書・論文〕
田中良昭「敦煌出土『請二和上答禪策十道』について」（『宗教研究』223,1975,

pp.57-88）→『田中敦煌』（pp.261-282）

田中良昭「敦煌出土「請二和上答禪策十道」について」（『佛教史學論文集（曉城趙明基博士追慕）』1988,pp.171-193）

黄青萍「〈禪策問答〉與〈答禪策十道〉」（『敦煌北宗文本的價値及其禪法—禪籍的歷史性與文本性』臺灣師範大學國文學系博士論文,2007,pp.351-353）

〔略記〕

本書はその標題からも窺われるように、２人の和上を請(しょう)して禪の要諦に關する10種の道理について第１問から第10問までの問いを提起し、それに答えさせたという問答形式をとり、この10問答が２度繰り返されて全體では20問答になっている。

この２人の和上の名は「空」と「自」とされるが、この２人は恐らく架空の人物とみられる。特に最初の10問中には、第１問の『禪經』、第３問の『般若經』（原文は『般經』）、第５問の『華嚴經』（原文は『花嚴經』）、第６問の『菩薩戒經』２回（原文は『菩薩戒』と『經』）、第８問の『經』（經名は未詳）というように、經典中の語句についての問いが多く、後の10問には、經典の引用はなく、その後は修禪と解脱、言と黙、心と境、淨と染、無相と有相、看心と無心、方便と眞實、定と惠等の初期禪思想の重要な課題をテーマとする問答である。前半では種々の大乘經典の教説を重視しつつ、後半では獨自の禪の教えを展開し、不立文字の禪の立場を鮮明にした初期禪宗語録の１種である。

ところで、黄青萍氏は「〈禪策問答〉與〈答禪策十道〉」（『敦煌北宗文本的價値及其禪法—禪籍的歷史性與文本性』2007）と題した學位請求論文で、本書と後述する『禪策問答』の２種について言及し、この兩者は歷史の側面からの思想史的位置づけを研究するには不十分としながらも、本書の内容からすれば、看心法に關しての解釋が南北二宗の思想的特徴を兼ね備えている傾向にあるものの、坐禪という形式を打破する南宗の立場により近いもの、との推定をされている。

８．絶觀論（入理緣門論、菩薩心境相融一合論、觀行法爲有緣無名上士集）

①P2045　②P2074　③P2732　④P2885　⑤BD02284（閏84）
⑥BD09790（朝11）　⑦BD11564　⑧舊石井光雄氏所藏本
⑨Дx 4259　⑩Дx 5881　⑪Дx 6230　⑫Дx 8768　⑬Ch1433

〔テキストの飜刻・校定〕

⑤鈴木貞太郎（大拙）『少室逸書』影印（1935, pp.57-70）

⑤鈴木貞太郎（大拙）『校刊少室逸書及解説』（1936, pp.73-86）→『鈴木禪思想史』2（pp.204-212）→〈大拙〉2（pp.201-209）

②③④久野芳隆「流動性に富む唐代禪宗典籍—燉煌出土本に於ける南禪北宗の代表的作品—」（『宗教研究』新 14-1, 1937, pp.136-144）

②③④鈴木大拙「敦煌出土達摩和尚絶觀論につきて」（『佛教研究』1-1, 1937, pp.57-68）

②③④久野芳隆「牛頭法融に及ぼせる三論宗の影響—敦煌出土本を中心として」（『佛教研究』3-6, 1939, pp.63-71）

⑤⑧鈴木大拙編、古田紹欽校『燉煌出土積翠軒本絶觀論』弘文堂書房, 1945, pp.1-37）

②③④⑧鈴木大拙『鈴木禪思想史』2（pp.199-204）→〈大拙〉2（pp.188-201）

①②③④⑤⑧柳田聖山「絶觀論の本文研究」（『禪學研究』58, 1970, pp.79-124）→〈柳田〉1（pp.89-133）

①②③④⑤⑧常盤義伸、柳田聖山『絶觀論』（禪文化研究所, 1976, pp.83-102）

⑬西脇常記『ドイツ将來のトルファン漢語文書』（京都大學學術出版會, 2002, pp.136-138）

⑨⑩⑪⑫中西久味「『俄藏敦煌文獻』禪籍資料初探」（『比較宗教思想研究』5, 2005, pp.61-78）

⑦『北京敦煌』109（p.074）

〔著書・論文〕

鈴木貞太郎（大拙）「觀行法　無名上士集」（『少室逸書解説』1936, pp.69-70）

久野芳隆「流動性に富む唐代の禪宗典籍—燉煌出土本に於ける南禪北宗の代表的作品—」（『宗教研究』新 14-1, 1937, pp.117-144）

鈴木大拙「敦煌出土達摩和尚絶觀論につきて」（『佛教研究』1-1, 1937, pp.52-68）

久野芳隆「牛頭法融に及ぼせる三論宗の影響—敦煌出土本を中心として」（『佛教研究』3-6, 1939, pp.51-88）

宇井伯壽「法融の弟子及び著述」（『宇井禪宗史』pp.117-118）

關口慈光（眞大）「絶觀論（敦煌出土）撰者考」（『大正大學學報』30, 31 合輯, 1940, pp.179-187）

鈴木大拙編・古田紹欽校「燉煌出土積翠軒本絶觀論解題」（『燉煌出土積翠軒本絶觀論』弘文堂書房, 1945, pp.1-7）

關口慈光（眞大）「燉煌出土「絶觀論」小考―牛頭禪研究の新資料として」（『天台宗教學研究所報』1, 1951, pp.71-77）

關口眞大「達摩和尚絶觀論（燉煌出土）は牛頭法融の撰述たるを論ず」（『印佛研』5-1, 1957, pp.208-211）

關口眞大「「達摩和尚絶觀論」と牛頭禪」（『關口達摩大師』pp.82-185）

中川孝「絶觀論を中心として見たる初期禪宗史の問題點」（『東北藥科大學紀要』5, 1958, pp.73-81）

中川孝「絶觀論考」（『印佛研』7-2, 1959, pp.221-224）

鎌田茂雄「寶藏論におよぼした絶觀論の影響」（同氏『中國華嚴思想史の研究』東京大學出版會, 1965, pp.390-393）

柳田聖山「牛頭禪の思想」（『印佛研』16-1, 1967, pp.16-23）→〈柳田〉1（pp.175-187）

柳田聖山「絶觀論の本文研究」（『禪學研究』58, 1970, pp.65-124）→〈柳田〉1（pp.77-133）

印順「有關法融的作品」（『中國禪宗史』臺灣, 正聞出版社, 1971, pp.111-115）→印順著・伊吹敦譯『中國禪宗史―禪思想の誕生―』（山喜房佛書林, 1997, pp.137-142）

柳田聖山「絶觀論とその時代―敦煌の禪文獻―」（『東方學報』52, 1980, pp.367-401）→〈柳田〉1（pp.134-174）

木南廣峰「『絶觀論』について」（『駒大大學院年報』14, 1980, pp.85-88）

木南廣峰「牛頭宗について―特に「絶觀論」を中心として」（『駒大佛教論集』12, 1981, pp.212-227）

小澤千代子「絶觀論の研究―特に三論宗との關連において」（『駒大大學院年報』15, 1981, pp.103-106）

末光愛正「吉藏の無説・説思想―牛頭思想に及ぼした三論思想の影響」（『駒大大學院年報』15, 1981, pp.44-52）

末光愛正「牛頭宗に及ぼせる三論宗の影響２―「達摩和尚絶觀論」末尾の第十四問答について」（『宗學研究』24, 1982, pp.221-225）

John R.McRae : "The Ox-head School of Chinese Buddhism : From Early Ch'an to the Golden Age", R.M.Gimello and P.N.Gregory, eds. *Studies in Ch'an and Hua-yen*, Studies in East Asian Buddhism, No.1(Honolulu : Univ. of Hawali Press in association with the Kuroda Institute, 1983, pp.169-253)

Ursula Jarand, *Dialog über das Auslöschen der Anschauung : ein früher chinesischer Text aus Tun-huang*, R.G. Fischer, 1987（ドイツ語譯）

柳田聖山「絶觀論」（『敦煌Ⅱ』pp.7-38）

楊曾文「牛頭法融及其禪法」（『佛教思想的傳承與發展—印順導師九秩華誕祝壽文集』臺灣，東大圖書公司，1995,pp.423-444）→楊曾文『唐五代禪宗史』（中國社會科學出版社，1999,pp.279-303）

田中良昭「初期禪宗における絶觀・無心・無念の系譜」（『平井俊榮博士古稀記念論集 三論教學と佛教諸思想』春秋社，2000,pp.389-408）→『田中敦煌』2（pp.383-402）

王鼎興「法融禪學思想之要旨」（『牛頭法融禪學思想研究』東呉大學中國文學系88學年度博碩士論文，2000,pp.35-58）

方廣錩「觀行法爲有緣」（『方・藏外』15,pp209-211）

〔略記〕

本書は、入理先生と弟子緣門による對話形式により、絶觀の法を論究した長篇で、形式内容共に『無心論』と極めて密接な關係にあるとみられ、現在までに13種の異本の存在が知られている。このうち古くからその存在が知られた①②③④⑤⑧の6種についての發見の經緯、その本文紹介および研究の状況等については、かねて柳田聖山氏の「絶觀論の本文研究」と題する論文の冒頭や「世界古典文學全集」36B『禪家語録』Ⅱの付録「禪籍解題」などに詳述されている。その後、ドイツ國立圖書館が所藏する敦煌トルファン文獻中に1種の存在が知られ、さらに俄藏敦煌文獻中にも4種、繼續刊行中のシリーズである『北京敦煌』にも2種の存在が報告され、都合13種の存在が知られるにいたった。

そのうち最初に發見紹介されたのは、1935年鈴木大拙氏の出版になる北京本の⑤で、「觀行法爲有緣無名上士集」の尾題を有する一本である。鈴木氏は、これを神會の弟子無名が神會に問うた「觀行法」を集めたもの、從ってこの「觀行法」なるものは、荷澤神會の禪法を述べたものとされた。しかしその翌年、久野芳隆氏が、パリでペリオ本の3種、すなわち「絶觀論」の首題の下に「菩薩心境相融一合論」の別名を付した未完の②、「入理緣門一卷」の首題、「緣門論一卷」の「緣門」を朱で「絶觀」と訂正した尾題を有する③、「達摩和尚絶觀論一卷」の尾題を有し、「辛巳（かのとみ）年三月六日寫記、僧法成」の奥付を有する④を發見され、それらを合わせて本文を定め、紹介と解説を付して發表すると、鈴木氏もこれとほぼ同時に、久野氏發見の3種の新たな校合を發表された。その後久野氏はあらためて前掲3種の校合をなした上、作者を菩提達摩では

なく、牛頭法融であるという主張をなし、宇井伯壽氏も『宗鏡録』巻97の「牛頭融大師絶觀論」の引文によって、久野氏と同様本書を牛頭法融の撰述とされた。

一方鈴木氏は、古田紹欽氏と共に、⑧の石井本の寫眞及びそれと⑤の北京本との對校を出版し、作者については菩提達摩であると主張された。こうして鈴木氏は當初の荷澤神會説を變えて菩提達摩説を主張し、一方、久野氏、宇井氏は牛頭法融説を主張して、兩説相い並行したまま問題を已後に遺していたのである。

その後この作者問題は、關口眞大氏によって意欲的に取り組まれた。すなわち1940年の「絶觀論（敦煌出土）撰者考」に始まる數種の論考は、牛頭法融の撰述とする久野説を更に一層強化し發展させたものであり、その後印順氏も關口説を支持されているが、それでも尚一方には鈴木説を支持する中川孝氏の論考も出現し、柳田聖山氏の論文にいたっても、この作者問題については、「今日のところ、すべてが仮説の域を出でない」として、更に檢討の餘地が十分あることを述べられている。

このように、從來本書の研究の焦點がその撰者問題に終始した點の反省をふまえ、新たに「三藏法師菩提達摩絶觀論」の首題、「觀行法爲有緣無名上士集」の尾題を有する善本①の存在を知られた柳田氏が、從來出現した6種の異本すべてを詳細に比較校合し、これら6種の異本に3段階の發展があったとする新説を出された。それによれば、「入理緣門一卷」を首題とする③⑧を第1段階、首題に達摩の名を付し、尾題を「觀行法爲有緣無名上士集」とする①⑤を第2段階、「絶觀論」の首題の下に「菩薩心境相融一合論」の別名を加え、尾題を「達摩和尚絶觀論」とする②④を第3段階として、これら3系統の本文を對照し、新たな資料提供をされた。なお柳田氏の論文中に、「ペリオ第2732號の末尾には、貞元甲戌（きのえいぬ）の年號と、甘州大寧寺で落蕃僧懷生が校訂したというコロホンのあることを、鈴木大拙先生が報ぜられてから、すべての學者が不用意にこれを信じているが、今手許に揃っている寫眞による限り、このことはすこぶる確かでない。おそらくは、他の資料のコロホンであろう。」との指摘があるが、このコロホン（奥付）が朱書きされたために、マイクロフィルムの寫眞には出なかったものであり、コロホンそのものは確かに存在するのである。ただ鈴木氏が報ぜられた通りのコロホンかというと、そこには疑問もあり、この問題については今後の檢討すべき課題の1つである。

本書の撰述者の問題をめぐって、近年の研究成果として田中良昭氏の「初

期禪宗における絶觀・無心・無念の系譜」（『平井俊榮博士古稀記念論集 三論教學と佛教諸思想』春秋社,2000）と題する論文が擧げられる。田中氏は、この問題について「おそらく牛頭宗の傳燈が確立した後に、この派の綱要書として作成され、一時期禪宗語録としての權威づけのために、他の達摩論と同様に「菩提達摩」の名を冠することが行われたが、やがて禪宗各派の確立と共に、改めて牛頭宗の派祖である法融のものとされ、それが九世紀前半の宗密や十世紀中葉の延壽へと繼承されていったのではないか」と推定された。

さらに、本稿の脱稿直前に刊行された『方・藏外』15に、方廣錩氏によって「觀行法爲有緣」と題するテキストの校訂が示された。それに付した解題では、方氏は本書の北京本⑤に存在する「觀行法爲有緣　無名上士集」という表記について、新たな見解を示された。すなわち、從來本書の尾題とされてきたこの「觀行法爲有緣　無名上士集」は、本書の尾題とすべきではなく、前半部分の『觀行法爲有緣』は次に連寫された文獻の首題であり、その下の「無名上士集」と次に改行して書かれた「沙門知嵩述」とは、合わせてこのテキストの「署名」とすべきであるとの指摘をされたのである。

本書は先に達摩論の１種となってから、後に牛頭法融の作品とされたという田中氏の假説に對して、論考こそないものの、正反對の推定を行ったのが伊吹敦氏である。伊吹氏は『禪の歴史』（法藏館,2000）と題する著書において、次のようにいう、「･･･古く「牛頭法融撰」として傳えられていたが、法融自身の著作ではなく、法融が牛頭宗の祖に祭り上げられた後に、その名を冠して出現した牛頭宗の綱要書と見るべきである。ただし、牛頭宗が衰退した後には達摩に假託されたらしく、今日傳わる寫本の中にも「達摩撰」とするものが複數存在している」。すなわち、伊吹氏は、本書が最初に牛頭法融のものとされていたが、牛頭宗が衰退した後に、達摩論の１種に假託されたという。

ところで、本書の異本である⑬は、西脇常記氏の『ドイツ将來のトルファン漢語文書』（京都大學學術出版會,2002）と題する著書によってその存在が明らかにされた。西脇氏の紹介によれば、⑬は、高さ14.4cm×幅20.8cmの殘卷で、「裏側にあたるCh1433vは、池田温『中國古代籍帳研究』（東京大學出版會,1979）所收の「唐開元十三年（七二五）西州籍」（p.250）とされるものである。實際にはこの籍帳の反古（ほご）紙を利用して、「絶觀論」の冒頭に近い部分が十行にわたって書寫されている」という。さらに、西脇氏は、⑬が從來知られた寫本のうち、④に近いことを指摘された。

一方、本書の⑨⑩⑪⑫の４種については、いずれも中西久味氏の「『俄藏

敦煌文獻』禪籍資料初探」（『比較宗教思想研究』5,2005）と題する論文によって最初に紹介されたものである。中西氏によれば、⑨は1行16字前後で、罫入りの紙に書寫された9行の殘簡であり、内容的には柳田氏による分段で示せば、第2段の末から第3段の前半に相當するもので、從來知られた寫本のうち、④にほぼ一致しているという。一方、⑩と⑪については、「ともに斷簡にすぎず、それぞれ6行、16行の寫本であるが、この2本は銜接する」といい、その内容は「柳田氏の分段の、第1段の最後の行から、第2段に相當している。また3系統のなかでは、P2045・北4014の系統のものである」と指摘された。ここにいう北4014とは、北8384の誤記とみられ、それは⑤の閏84の新番號である。そして、⑫については、わずかに「絶觀論」の3文字が書寫されている碎片であるという。

さらに、本書の⑥⑦の2種については、いずれも繼續刊行中のシリーズである『北京敦煌』によってはじめて知られたものである。⑥の形態については、同シリーズの第106冊の卷末に付された「條記目録」の紹介によれば、4紙を貼り合わせたもので、縱が16cm、横が153cmの殘卷に1行およそ14～16字で書寫されており、あわせて97行が殘されているが、首尾ともに缺いており、本文に朱筆による記號や、チベット語による注などが施されているとのことである。なお、⑥の内容は、柳田氏の分段によると、およそ第6段のはじめから第13段のはじめまでの部分に相當するものである。一方、⑦の形態については、同シリーズの第109冊の「條記目録」によれば、1紙のみで、縱が15.6cm、横が13.2cmの斷片におよそ9行が殘されているが、首尾ともに缺いており、本文に朱筆による記號や、チベット語による注が施されているとのことであるが、その内容は、柳田氏の分段によると、およそ第5段の中途から第6段の冒頭にかけての部分に相當するものである。

9．禪策問答

①新1254

〔テキストの飜刻・校定〕

①方廣錩「禪策問答」（『方・藏外』1,pp.45-52）

①沖本克己「『禪策問答』について」（『禪文研紀要』23,1997,pp.57-88）→同氏『禪思想形成史の研究』〈花園大學國際禪研究所研究報告〉5（1998,pp.214-219）

〔著書・論文〕

方廣錩「禪策問答」（『方・藏外』1,p.45）

沖本克己「『禪策問答』について」（『禪文研紀要』23,1997,pp.57-88）→同氏『禪思想形成史の研究』〈花園大學國際禪研究所研究報告〉5（1998,pp.210-231）

黄青萍「〈禪策問答〉與〈答禪策十道〉」（『敦煌北宗文本的價値及其禪法—禪籍的歴史性與文本性』臺灣師範大學國文學系博士論文,2007,p.352）

〔略記〕

本書は近年北京圖書館（現、中國國家圖書館）所藏の敦煌文獻から新たに發見されたものである。すなわち、方廣錩氏の「禪策問答」（『方・藏外』1）と題する論文の發表によってはじめてその存在が知られるに至った。方氏の解題によれば、本書の著者は不明であるが、自問自答の形式で30の問答からなり、そこで言及された内容の傾向からすれば、おそらく北宗系統のものであろうとする。また、方氏は①のテキストが、首缺の『達摩禪師論』と、「達摩禪師作」と記される『息諍論』の間に書寫された都合3種の禪宗文獻の連寫本であることを明らかにされ、①を底本とした本書の校訂をされている。

この方氏の研究成果を踏まえつつ、さらに本文の校訂や訓註を付して本書に對する新たな考察を試みられたのが、沖本克己氏の「『禪策問答』について」と題する論文である。沖本氏によれば、本書は「禪宗の様々な教理的課題について經證を用いつつ闡明（せんめい）するもので、内容から推して比較的初期の禪宗文獻のスタイルを持つものである」という。さらに沖本氏は、この寫本が首缺の『達摩禪師論』、續いて本書、さらに「達摩禪師作」と記される『息諍論』という3種のテキストの連寫に注目し、本書を挾む2種の「達摩論」が、いずれも東山法門系統の作品と考えられるからして、本書も東山法門ないしは北宗の立場に立つものと推定され、また本書に出現する「安心」、「看心」、「凝心」、「絶思離想」、「覺觀」、「有心無心」などの術語も北宗系に見られる特徴的な用語であるとして、本書を北宗系の文獻とする方氏の説を擁護された。さらに沖本氏は30の問答のすべての項目を擧げ、本書が初期禪宗の教理綱要書の性格を有する一方、禪僧の生活に具體的に言及した部分が多いのは、「都市化した禪宗が墮落ないし妥協の様相を示し始めていることを示唆する」ものであることを指摘されている。

10. 先德集於雙峰山塔各談玄理十二

① P3559

〔テキストの飜刻・校定〕

①柳田聖山「傳法寶紀とその作者―ペリオ 3559 號文書をめぐる北宗禪研究資料の札記・その１―」(『禪學研究』53,1963,p.55) →〈柳田〉１ (pp.199-200)

①冉雲華「敦煌文獻與僧稠的禪法」(『華岡佛學學報』6,1983,p.92) →同氏『中國禪學研究論集』(臺灣 , 東初出版社 ,1990 初版 ,pp.54-89)

〔著書・論文〕

柳田聖山「傳法寶紀とその作者―ペリオ 3559 號文書をめぐる北宗禪研究資料の札記・その１―」(『禪學研究』53) 1963,pp.45-77) →〈柳田〉１ (pp.188-223)

冉雲華「敦煌文獻與僧稠的禪法」(『華岡佛學學報』6,1983,pp.73-103) →同氏『中國禪學研究論集』(臺灣 , 東初出版社 ,1990 初版 ,pp.54-89)

袁德領「敦煌本『導凡趣聖心決』録文及作者考略」(『禪』2000-3)

〔略記〕

本書を含む P3559 の全體については、既刊の本シリーズの「Ⅰ燈史類」の４『傳法寶紀』の略記を參照されたいが、この P3559 の出現は、單に中國禪宗における最初期の北宗の燈史である『傳法寶紀』を完帙にしたのみならず、北宗禪に關する多くの新資料を提供した點で特筆すべきものである。

本書も、この P3559 の『傳法寶紀』に續いて書寫されたもので、12 人の先德が雙峰山の塔に集まり、各々玄理を談じたというのが標題の意味するところであるが、勿論これは歴史的事實を傳えたものではない。標題の最後に細字で「十二」とあるのは、集った先德の數が 12 人ということで、その 12 人とは脇(きょう)比丘、馬鳴菩薩、超禪師、佛陀(ぶっだ)禪師、可尊者、昱(いく)上人、敏師、能禪師、顯禪師、道師、藏禪師、秀禪師であり、この 12 人の名前の右肩にはすべて△印が付されており、本書がこの 12 人の語を集めたものであることを示している。そして最後に、「稠禪師意」とあるのは、その名前に△印もなく、次に書寫された「大乘安心入道法」に關する問答の標題と考えられる。

ところが、中國人研究者の袁德領氏が「敦煌本『導凡趣聖心決』録文及作者考略」と題した論文の中で、こうした見方に異義を呈された。すなわち、袁氏は、本書がこれに後續する「稠禪師意」と呼ばれるものと共に「安心法」

をテーマにしたものであるからして、兩者をそれぞれ獨立したものとみるのではなく、１つにまとめてみるべきであると主張された。

ところで、本書に記されている12名の先德の言は、いずれもごく短かいものであるが、そこには脇比丘や馬鳴菩薩等の西天の祖師をはじめ、佛陀や敏師の如き達摩系以外の禪師をも含み、しかも能禪師と秀禪師の言を併記している點は、南北二宗の對抗意識がそれほど明確にされていなかったものと考えられる。

周知の通り雙峰山は、四祖道信、五祖弘忍のいわゆる東山法門の發祥の地であり、その流れを汲んだ人びとによって中國禪の發展する基礎が確立されたのである。從って、本書は東山法門の果した歴史的役割を顯彰するために、その淵源を西天の祖師に求めて創り出されたものとみられ、しかも祖師自身の言葉でなく、むしろ假託されたものが多いと考えられる。

11. 息諍論

①新 1254　②新 1255

〔テキストの飜刻・校定〕

①②方廣錩「息諍論」（『方・藏外』1,pp.54-59）

①②木村清孝「『息諍論』考」（同氏『東アジア佛教思想の基礎構造』春秋社,2001,pp.286-289）

〔著書・論文〕

方廣錩「息諍論」（『方・藏外』1,p.53）

木村清孝「『息諍論』考」（『〈聖嚴博士古稀記念論集〉東アジア佛教の諸問題』山喜房佛書林,2001,pp.21-35）→同氏『東アジア佛教思想の基礎構造』春秋社,2001,pp.286-297）

〔略記〕

本書は、前述の『禪策問答』と同様に當時の北京圖書館（現、中國國家圖書館）所藏の敦煌文獻から新たに發見されたものである。すなわち、方廣錩氏の「息諍論」（『方・藏外』１）と題する論文の發表によってはじめて紹介されたものである。方氏の解題によれば、本書は首缺の『達摩禪師論』と『禪策問答』に續いて連寫されているものであるが、途中で分斷されたために、２つの番

號が付されて２種として計上されたという。幸いなことに、寫本は分斷されたものの本書の内容には缺損がなく、①と②を繋ぎ合わせれば見事に復元することのできるものである。内題に「達摩禪師作」と記されていることから、やはり「達摩論」の１種と見るべきであろう。また、方氏は①と②を繋ぎ合わせ、それを底本とした本書の校訂をされている。

この方氏の研究成果を踏まえて、まず本書を10節に分けて訓讀し、さらにその思想内容の分析を行い、思想史的位置づけを試みられたのが、木村清孝氏の「『息諍論』考」（『〈聖嚴博士古稀記念論集〉東アジア佛教の諸問題』山喜房佛書林,2001）と題する論文である。木村氏は、本書の「達摩禪師作」を眞實らしく見せるために、梁代の思想傾向をも勘案しているとしながら、それ自體がもつ思想的性格はかなり複雜であると指摘された。さらに、本書が三階教の思想との關連があることは明白であるとし、本書の成立時期については、「おそらく武周王朝の聖暦２年（699）に三階教徒の活動が乞食（こつじき）・坐禪等に限定され、かつその文獻群が正規の佛典としての扱いをされなくなった以後で、しかもまだいわゆる北宗に一定の勢力があり、南宗の覇權が確立していなかった８世紀前半頃」と推定された。

ただ、本書は『達摩禪師論』、『禪策問答』に續いて連寫されている形態を有し、「達摩禪師作」と假託されていることからして、禪宗文獻として受容されていたことは明らかである。こうした意味で、本書を禪宗文獻として取り扱うことが十分可能であろう。

12. 大潙警策（彦和尚集）

① P4638

〔著書・論文〕

田中良昭「彦和尚集とされる敦煌本『大潙警策』について」（『印佛研』22-2, 1974, pp.98-103）→『田中敦煌』（pp.335-342）

〔略記〕

本書は、從來一般に『潙山警策』の名で知られ、特に宋代に曹洞宗の守遂（しゅすい）が、『四十二章經』、『佛遺教經』、『潙山警策』の３種を１つにまとめて『佛祖三經』と呼び、これに注を施して以來、禪宗における最も重要な佛經祖録として重んじられ、日本でもこれを注釋し、講義をしたものがかなりの數にの

ぼっている。『新纂禪籍目録』によれば、『潙山警策』は『潙山大圓禪師警策』という題名で、12 世紀後半頃大日能忍によって刊行されたことが知られ、また『佛祖三經』については、守遂による『佛祖三經註』が、門人の史德賢によって開版されるに際して付された張銖（ちょうしゅ）の序に、「紹興十二年」（1139）の紀年があるが、いずれにしても 12 世紀以前にはその存在さえ知られていなかったものである。

ところで敦煌文獻から發見された本書の寫本は、その紙背（實際は表）の獻物牒に、敦煌の歸義軍時代（846-1036?）に當る五代後唐の清泰年間（934-936）の紀年が 3 回も書き記されているからして、その書寫年代は遲くとも 980 年頃とみられ、敦煌文獻では他に異本もなく、現存最古の寫本としてその古型を傳える貴重なものである。

その標題の『大潙警策』の下には「彦（げん）和尚集」とあり、この彦和尚は、『景德傳燈録』巻 11 に潙山靈祐の法嗣 43 人中 10 人見録の附見として名のみ擧げるものの中に、「潙山彦禪師」とある人物を指すとみられ、この彦禪師が、師の説示された學道者への警策文を編集して一巻としたのが本書であると考えられる。

この寫本は、『大潙警策』に續いて同一人の手による『隋朝三祖信心銘』（原文は『信心信銘』）が書寫され、これは流布本『信心銘』の最古の寫本とされるものであるが、『大潙警策』『信心銘』共に、今日の流布本と對比すると誤字脱字が極めて多く、内容的には決してよい寫本とはいえない。ただ馬祖以後、陸續として成立する祖師の語録が敦煌文獻にはまったく影をひそめてしまう中にあって、本書の出現は特筆に價するといえよう。

13. 大乘開心顯性頓悟眞宗論

① S4286　② P2152　③ S7805　④ BD09690（坐 11）

〔テキストの飜刻・校定〕

②『大正藏』85 古逸部 , 1932, pp.1278a-1281a —㊦

②㊦金九經『薑園叢書』（瀋陽 , 1934）—㊥

①饒宗頤「神會門下摩訶衍之入藏　兼論禪門南北宗之問題」（『香港大學五十週年記念論文集』1 圖版 , 1964, pp.173-185）→饒宗頤『選堂集林・史林』（中華書局香港分局 , 1982）→『饒宗頤二十世紀學術論文集』8（臺北 , 新文豐出版股份有限公司 , 2003, pp.86-101）

②㊟〈大拙〉3,1968,pp.318-330

③方廣錩編『英國圖書館藏敦煌遺書目録　斯6981號～斯8400號』（北京，宗教文化出版社，2000,pp.233-234）

①②田中良昭「校注和譯『大乘開心顯性頓悟眞宗論』」（『松ヶ岡年報』3,1989,pp.173-215）→『田中敦煌』2（pp.135-168）

④程正「『大乘開心顯性頓悟眞宗論』の依據文獻について—特に『大乘起世論』との關連を中心に」（『駒大佛教紀要』69,2011,刊行予定）

〔著書・論文〕

矢吹慶輝「敦煌出土支那古禪史並に古禪籍關係文獻に就いて」（『鳴沙餘韻解説』第2部pp.538-540）

柳田聖山「禪門經について」（『塚本博士頌壽記念佛教史學論集』1961,pp.869-882）→〈柳田〉1（pp.301-314）

饒宗頤「神會門下摩訶衍之入藏　兼論禪門南北宗之調和」（『香港大學五十週年記念論文集』1,1964,pp.173-185）→饒宗頤『選堂集林・史林』（中華書局香港分局，1982）→『饒宗頤二十世紀學術論文集』8（臺北，新文豐出版股份有限公司，2003,pp.86-101）

田中良昭「北宗禪研究序説—『大乘開心顯性頓悟眞宗論』の北宗撰述について—」（『駒大佛教紀要』25,1967,pp.44-58）→『田中敦煌』1（pp.237-259）

柳田聖山「北宗禪の一資料」（『印佛研』19-2,1971,pp.127-135）→〈柳田〉1（pp.287-300）

柳田聖山「北宗禪の思想」（『禪文研紀要』6,1974,pp.67-104）→〈柳田〉1（pp.224-286）

Jonathan Christopher Cleary: “Treatise on the True Sudden Enlightnment School of the Great Vehicle, Which Opens Up Mind and Reveals Reality-Nature” (*Zen dawn-Early Zen texts from Tun huang*- Boston. Shambhala, 1986, pp.103-130)（英譯）

John R. McRae: “Shien-hui and the Teaching of Sudden Enlightenment in Early Ch’an Buddhism”,*Sudden and Gradual-Approaches to Enlightenment in Chinese Thought*,（STUDIES IN EAST ASIAN BUDDHISM,No.5）University of Hawaii Press,1987,pp.227-278.→馬克瑞「神會與初期禪學中的頓悟説」（覺醒主編，馮煥珍・龔雋・秦瑜・唐笑芝等譯『頓與漸—中國思想中通往覺悟的不同法門』〈覺群佛學譯叢〉上海古籍出版社，2010,pp.191-228）

伊吹敦「『頓悟眞宗金剛般若修行達彼岸法門要決』と荷澤神會」（三崎良周編『日本・中國　佛教思想とその展開』（山喜房佛書林，1992, pp.291-325）

伊吹敦「『大乘開心顯性頓悟眞宗論』の依用文獻について」（『印佛研』41-1, 1992, pp.97-100）

田中良昭「『神會塔銘』と『侯莫陳壽塔銘』の出現とその意義」（『禪文研紀要』24, 1999, pp.221-236）→『田中敦煌』2（pp.479-493）

程正「『頓悟眞宗金剛般若修行達彼岸法門要決』と『大乘開心顯性頓悟眞宗論』」（『駒大大學院年報』35, 2002, pp.075-084）

田中良昭「中國禪研究の現代的課題(1)―神會の評價をめぐって―」（『宗學と現代』5, 2003, pp.169-227）→『田中敦煌』2（pp.637-679）

衣川賢次「唐玄宗『御注金剛般若經』的復元與研究」（項楚，鄭阿財主編『新世紀敦煌學論集』巴蜀書社，2003, pp.114-125）→同氏「唐玄宗『御注金剛般若經』的復元與研究」（『花大文學部紀要』36, 2004, pp.1-76）

山部能宜「北宗禪文獻にみられる唯識教義の影響」（『加地伸行博士古稀記念論集：中國學の十字路』研文出版，2006, pp.571-591）

干田たくま「戒概念の變化から考察した初期禪宗の頓悟思想―心地無相戒成立前夜―」（『禪學研究』85, 2007, pp.95-117）

程正「『大乘開心顯性頓悟眞宗論』の依據文獻について―特に『大乘起世論』との關連を中心に」（『駒大佛教紀要』69, 2011, 刊行予定）

〔略記〕

本書は矢吹慶輝氏の将來された寫眞に基づき、1932年『大正藏』巻85の古逸部にペリオ本の②が收録されて以來、その存在が知られるようになった全巻70數番の問答からなる唐代の文獻である。標題の下には「沙門大照居士慧光集釋」とあり、一方尾題の方は『大乘開心顯解脱論』となっている。矢吹氏は1933年刊行の『鳴沙餘韻解説』において、本書をその序文によって、先に嵩岳慧安、後に荷澤神會に事えた大照禪師と、俗姓を李、名を惠光という居士との問答であるとし、その内容を「唐代南禪の一流」というように、南宗系の資料として位置づけられたのである。

次いでその翌1934年には、奉天の金九經氏が同じくペリオ本の②とそれを收録した『大正藏』本すなわち㊇とを對校し、『薑園叢書』3巻中の1巻として安心寺本『達摩大師觀心論』と合刻で出版された。

こうして先ず資料紹介がなされたのであるが、それから5年後の1939年に

至って、宇井伯壽氏がその著『宇井禪宗史』の第5「荷澤宗の盛衰」に、本書に名を出す沙門大照を神會の弟子として擧げられ、また鈴木大拙氏の遺稿となった『禪思想史研究』第3は、1968年〈大拙〉3として初めて世に出されたものであるが、既に昭和20年、すなわち1945年頃にその稿が成っていたという第1篇の「慧能示寂直後の禪思想」においては、南宗研究の材料として示された10種の最後に本書を擧げている。このように、矢吹氏に始まり宇井氏、鈴木氏を通じて、本書は一貫して南宗系の資料とみられてきており、それが通説となっていたのである。それは弘忍下の南宗慧能と北宗神秀の禪風を、南頓北漸の對立というパターンで把え、從って頓悟を主張する本書は當然南宗禪に屬するものという立場からなされた主張とみてよいであろう。

ところが、1960年代に入ると、この南頓北漸は新たな段階を迎える。

そのきっかけとなったのは、『禪門經』と『頓悟大乘正理決』が敦煌から出現したことである。まず1961年にS5532の『禪門經』を紹介し論究された柳田聖山氏は、この『禪門經』の序者沙門慧光と、本書の内題にある沙門大照居士慧光との關係について觸れられ、結局兩者を別人とされたのであるが、一方1964年、神會門下の摩訶衍の入藏について論究され、同時に①を寫眞で紹介された香港の饒宗頤氏は、兩者の同一人説を立てられた。田中良昭氏は後述する論文で、兩者の經歴を比較檢討し、兩者の別人説を立てたのであるが、この問題は更に本書自體の内題にある「沙門大照居士慧光」をどのようにみるか、という問題とも關連する。すなわち本文の「居士問曰、云々。大照禪師答曰、云々」で始まる問答形式から、「沙門大照」と「居士慧光」を別人とみて兩者の問答とみる見方と、これを「時有居士、俗姓李、名惠光、是雍州長安人也。法名大照」という序文からして、惠光は俗名、大照は法名、從って兩者は同一人物とする見方に分れるのであり、前者をとるのが矢吹氏と饒氏、後者をとるのが柳田氏である。田中氏も後者をとり、同一人物の自問自答、更には架空の人物を立てての問答かともみたのであるが、なお最終的結論には達していなかった。

しかしながら、1960年代の柳田、饒兩氏の關心事は、それ以前のいわゆる南頓北漸の對立として南北兩宗を固定的にみる見方に對する批判として、新たな問題提起をすることにあった。共に1952年、ポール・ドゥミエヴィル(Paul Demiéville）氏によって出版された『ラサの宗論』（“Le Concile de Lhasa”）で紹介されたP4646の王錫撰『頓悟大乘正理決』において、中國側頓門派の代表である摩訶衍が、自ら「依止和上、法號降魔、小福、張和上、准仰大福六和上、

同教示大乘禪門、自從聞法已來、經五六十年」といっていることに注目され、この内、降魔、小福、大福が、神秀下の降魔藏、惠福、義福をさし、共に北宗禪を代表する人々であることから、摩訶衍の「頓悟大乘」の主張は、既に北宗禪の人々に芽生え始めていたものであり（柳田説）、更に摩訶衍は南北兩宗の調和をしたのだ（饒説）という新たな主張がなされたのであり、この摩訶衍と同じ立場に立つものとして、柳田氏は『禪門經』の慧光を、饒氏は『禪門經』と本書の慧光を位置づけられたのである。

一方、田中氏が本書に關心を持ったのは、むしろ本書の内容の上からで、神尾弋春氏によって北宗の大通神秀の作であることが論證された『觀心論』と本書との密接な關係についてである。兩者共に卷頭に「觀心」を心要とすべきを説いていること、兩者に『温室經』の同一部分の引用があり、しかもそれによって大乘頓悟の立場を主張していること、三聚淨戒についても同一の説示のあること等によって、本書の北宗撰述説を主張し、併せて『頓悟大乘正理決』『觀心論』『禪門經』を連寫する敦煌寫本 P4646 についても、それが北宗頓悟の思想的背景を示す資料ではないかという推論をしたのであるが、北宗頓悟説の主張は、柳田、饒兩氏と變るものではない。

さらに本書と『頓悟眞宗金剛般若修行達彼岸法門要決』（以下、『頓悟眞宗要決』）との間に極めて酷似している序文やタイトルなどのあることに注目された柳田聖山、田中良昭の兩氏は、神會（684-758）の力説した「頓悟」思想に刺激された神會以後の後期北宗おいて、神會の主張を自派に取り込んでまず本書が成立し、それをまねて成立したのが『頓悟眞宗要決』である、という「北宗頓悟説」と本書の後期北宗成立説を主張したのである。

ところで、1980 年代初期に中國の龍門から『大唐東都荷澤寺歿故第七祖國師大德於龍門寶應寺龍崗腹建身塔銘並序』（以下、『神會塔銘』）と呼ばれる神會の塔銘が發見され、これによって神會の生卒年は、かつて胡適氏によって考證された 670-762 の 93 歲とする説ではなく、684-758 の 75 歲ということが判明したのである。これを受けて、まずジョン・マクレー（John R. McRae）氏が、“Shien-hui and the Teaching of Sudden Enlightenment in Early Ch'an Buddhism”（*Sudden and Gradual-Approaches to Enlightenment in Chinese Thought*, STUDIES IN EAST ASIAN BUDDHISM,No.5, University of Hawaii Press,1987.）と題する論文を發表された。この論文においてマクレー氏は、この『神會塔銘』と、ベルナール・フォール（Bernard Faure）氏が發表された “Le maître de dhyāna Chih-Ta （智達） et le ‘subitisme’ de L' école du

Nord", 一崔寛著『六度寺侯莫陳大師壽塔銘文並序』（*Cahiers D'Extrême-Asie V.2*,1986.）と題する論文で用いられた『頓悟眞宗要決』の著者の塔銘とみられる『六度寺侯莫陳大師壽塔銘文並序』（以下、『壽塔銘』）を手がかりにして、『頓悟眞宗要決』の成立年を712年とし、同じ年に後に南宗頓悟説を唱えた神會がまだ慧能の門下に列していることから、從來考えられていた本書の影響下で『頓悟眞宗要決』が成立したという圖式ではなく、『頓悟眞宗要決』こそ本書の原型であり、しかも本書の完成は少なくとも開元8年（720）以降でなくてはならない、と推定されたのである。ちなみに、マクレー氏のこの論文の中國譯が、2010年に上海古籍出版社より刊行された『頓與漸—中國思想中通往覺悟的不同法門』に收録されている。

フォール氏とマクレー氏の論文は、いずれもが從來なかった新知見を示した貴重な研究成果ではあったものの、外國語で書かれた論文であったために、日本の學界においてはただちに反響を呼ぶものとはならなかったことが惜しまれる。

一方、伊吹敦氏が「『頓悟眞宗金剛般若修行達彼岸法門要決』と荷澤神會」と題した論文を發表された。伊吹氏は獨自の調査を行い、まず當時新刊であった叢書である『北京圖書館藏中國歷代石刻拓本匯編』（北京圖書館金石組編 ,1989 ～ 1990, 中州古籍出版社）に、やはりこの『壽塔銘』の存在することに注目し、これによって侯莫陳琰の生卒年が660 － 714の55歳であることを特定された。さらに伊吹氏は、『神會塔銘』との對照をはじめとするさまざまな檢證を行った結果、從來の「北宗頓悟説」に對して異議を唱え、侯莫陳琰の『頓悟眞宗要決』が712年に成立し、彼の主張する「頓悟」思想が神會に大きな影響を及ぼしたことを指摘されたのである。

また、本書には『頓悟眞宗要決』のみならず、柳田氏に智詵の『般若心經疏』、『修心要論』、田中氏に『觀心論』、『楞伽師資記』、伊吹敦氏に『大乘無生方便門』、『諸經要抄』などからの引用のあることもそれぞれ指摘されている。

その後、西口芳男氏が「上圖一三八V佛教問答と『頓悟眞宗論』」と題する論文を發表された。西口氏は『頓悟眞宗論』に先行する『金剛般若經挾注（假題）』（S2068、『大正藏』85所收）の該當箇所を指摘した上で、上海圖書館藏敦煌吐魯番文獻138V（以下、上圖138V）が本書の主要部分を含んでいることを突き止められたのである。ただ殘念なことに、卷子本の上圖138Vは首尾ともに缺いているために、その本來のタイトルがわからず、その時點ではその異本の存在もまったく知られていなかった。

さらに、衣川賢次氏が「唐玄宗『御注金剛般若經』的復元與研究」と題する中國語で書かれた論文を發表された。衣川氏のこの論文は、房山石經本（完本、但し磨滅や缺損あり）を底本とし、S2068（首尾を缺く斷簡）、1037（ドイツ國家圖書館藏、11行の殘卷）と303（ドイツ國家圖書館藏、3行の殘卷）を參校本に用いて、從來散佚したとみられていた唐の玄宗皇帝による『御注金剛般若經』のテキストの復元を試みたすぐれた研究成果であって、必ずしも本書に焦點を合わせたものではなかった。しかし、その論文の最後の注記8では、本書と次項で紹介する『大乘起世論』について極めて重要な指摘をされているのである。本書に關するものに限っていえば、次の4點に絞ることができる。

1．本書は『頓悟眞宗要決』、『大乘無生方便門』、『觀心論』、『楞伽師資記』などの資料を引用して再編した僞託の文獻である。
2．本書に先行する資料には、新たに『御注金剛般若經』（＝西口芳男氏が指摘された『挾注金剛般若經（假題）』に相當するもの）、『大乘起世論』の2種を加えることができる。
3．『御注金剛般若經』は開元23年（735）に成立したものであるから、本書の成立はそれより以降でなかればならない。
4．本書の第6～15段（田中良昭氏による分段）の内容と『大乘起世論』の該當部分の内容が完全に一致する。本書のこの部分の内容は、比較的獨立性の強いものであるのに對して、『大乘起世論』の内容は、その前後と深くかかわって構成されていることから、本書が『大乘起世論』を引用したことになる。

また、程正氏の「『大乘開心顯性頓悟眞宗論』の依據文獻について―特に『大乘起世論』との關連を中心に」と題する論文においては、本書と『大乘起世論』に關する從來の研究成果を踏まえつつ、『大乘起世論』こそが本書の最大の資料源であることを兩者の内容の對比を通じて明らかにしたのである。そして、初期禪宗文獻としての本書は、著者自身による創作を目的としたものではなく、それに先行する種々の文獻の内容をかき集めた上で、自らの意見や主張を巧みに取り入れて補強する性格を有するものであることも、その著者とされてきた「沙門大照居士慧光集釋」にある「集釋」というキーワードを手がかりにして明らかにしたのである。

ところで、山部能宜氏の「北宗禪文獻にみられる唯識教義の影響」と題す

る論文においては、北宗禪文獻である『圓明論』、「修心要論附記」、本書を資料として用いつつ、そこにみられる顯著な唯識的要素を論究されている。山部氏は、「北宗禪と唯識思想との關係は、從來考えられていた以上に密接なものがあったようである」とし、本書にみられる唯識的要素については、「唯識文獻に大きく依存しているのであるが、その一方では唯識教義の通説から逸脱することを厭わないのである」と指摘し、その原因については、「これらの禪文獻の著者達は、第一に實踐者だったのであって、文獻・教義學者ではなかったのだということではないだろうか。恐らく彼らは自分達が修行によって到達した境地を佛教の教義概念を用いて表現しようとしていたのであって、教義文獻に見られる概念をそのまま忠實に傳えようという意圖は初めからもっていなかったのであろう」との推定をされたのである。

一方、本書のテキストの③については、方廣錩氏によって録文され、『英國圖書館藏敦煌遺書目録　斯6981號～斯8400號』の中で初めて紹介されたものである。ただ、方氏は③を本書ではなく、『大乘起世論』の異本とされていたが、程氏の比定により③が本書の新出異本であることが證明されたのである。

さらに、本書④のテキストは、2005年より刊行繼續中のシリーズである『北京敦煌』の第106册にその寫眞が公にされたものである。なお、④の形態については、同書の卷末に付されている「條記目録」によれば、2紙を貼り合わせたもので、縱が28.8cm、横の最も長いところが10.9cmの殘卷に1行凡そ20字で書寫されており、合わせて約17行が殘されているが、首尾ともに缺けており、また、全卷に朱で記號がつけられていて、おそらく吐蕃支配期の寫本であろうということである。

14. 大乘起世論

①P2039　②上圖138V

〔テキストの飜刻・校定〕

①方廣錩「大乘起世論」（『方・藏外』3,pp.55-69）

②西口芳男「上圖一三八Vと『頓悟眞宗論』」（『禪文研紀要』25,2000,pp.76-85）

〔著書・論文〕

田中良昭「菩提達摩に關する敦煌寫本三種について」（『駒大佛教紀要』31,1971,

pp.161-179）→『田中敦煌』（pp.196-197）

上山大峻「敦煌における禪の諸層」（『龍谷大學論集』421,1982,pp.88-121）→同氏『敦煌佛教の研究』（法藏館,1990,pp.401-437）

方廣錩「大乘起世論」（『方・藏外』3,p.54）

西口芳男「上圖一三八Vと『頓悟眞宗論』」（『禪文研紀要』25,2000,pp.57-105）

衣川賢次「唐玄宗『御注金剛般若經』的復元與研究」（項楚,鄭阿財主編『新世紀敦煌學論集』巴蜀書社,2003,pp.114-125）→同氏「唐玄宗『御注金剛般若經』的復元與研究」（『花大文學部紀要』36,2004,pp.1-76）

程正「『大乘開心顯性頓悟眞宗論』の依據文獻について―特に『大乘起世論』との關連を中心に」（『駒大佛教紀要』69,2011, 刊行予定）

〔略記〕

本書についていち早く言及されたのは田中良昭、上山大峻の兩氏である。

まず、田中氏がペリオ本『天竹國菩提達摩禪師論』（P2039）を紹介されるに際し、本書がそれに續いて連寫されていることからその存在に觸れたのである。すなわち、P2039に關する書誌學情報を紹介した上で、その裏の第3紙6行から第8紙にかけて書寫された本書については、その冒頭數行の本文を紹介されたものの、あくまで『天竹國菩提達摩禪師論』に焦點を當てていたために、本書が禪宗文獻であるか否かについては言及しなかった。

一方、上山大峻氏は「敦煌における禪の諸層」と題する論文の中で、本書を含むP2039寫本の形態を紹介された。すなわち、P2039の表には法成述・談迅福慧筆録の「瑜伽論第四十四分門記」が書寫されており、その裏面を利用して「天竺國菩提達摩禪師論」、「大乘起世論一卷」、「三界唯心無外境論一卷」、「金剛經讃一卷」の順に4種の文獻が連寫されているという。しかも表に書寫された『瑜伽師地論』卷44の講義は、大中12年（858）に行われたことが立證されたことからして、裏面の4種の寫本は、それ以後「相當年月を經た900年以後」と推定されている。

その後、本書に關する研究は停滯期に入ったが、こうした閉塞的状況を打破したのが、方廣錩氏主編の『藏外佛教文獻』第3輯の刊行である。すなわち、この書には方廣錩氏による本書の本文校訂と簡單な解題が收録されている。ここにいたって、本書がはじめて方氏によって禪宗文獻であるという明確な位置づけがなされたのである。その解題によれば、本書はそのテキストがP2039の一種のみで、その書寫年代を凡そ9世紀前半とし、さらに思想面

においても文體面においても、色濃く南宗禪の色彩を帯び、恐らく慧能系統の禪者によったものであろうとの推定がなされたのである。

次いで、西口芳男氏が、「上圖一三八Ｖ佛教問答と『頓悟眞宗論』」と題する論文を發表された。すなわち西口氏は『頓悟眞宗論』に先行する『金剛般若經挾注（假題）』（S2068、『大正藏』85所收）の該當箇所を指摘した上で、上海圖書館藏敦煌吐魯番文獻138V（以下、上圖138V）が『頓悟眞宗論』の主要部分を含んでいることを突き止められたのである。ただ殘念なことに、卷子本の上圖138Vは首尾ともに缺いているために、その本來のタイトルがわからず、その時點ではこれが本書の異本であることは知られていなかった。しかし西口氏は、上圖138Vの缺損部分を含めて、『頓悟眞宗論』に關連する内容がどこからなのかを見事に預想して、その中身からすれば上圖138Vが三論宗の吉藏の思想に近い立場にあるものであるとし、「牛頭宗興起以前の三論を受ける實踐者のグループの資料ではないか」と推定され、その上でこの首尾ともに缺く上圖138Vの本文を校訂し、訓註を施されたのである。

ところで、衣川賢次氏が「唐玄宗『御注金剛般若經』的復元與研究」と題する中國語で書かれた論文を發表した際に、本書の研究上極めて重要な示唆を與えられたのである。すなわち、衣川氏のこの論文は、房山石經本（完本、但し磨滅や缺損あり）を底本とし、S2068（首尾を缺く斷簡）、1037（ドイツ國家圖書館藏、11行の殘卷）と303（ドイツ國家圖書館藏、３行の殘卷）を參校本に用いて、從來散佚したとみられていた唐の玄宗皇帝による『御注金剛般若經』のテキストの復元を試みたすぐれた研究成果である。それは必ずしも『頓悟眞宗論』或いは本書に焦點を合わせたものではなかったが、この論文の最後の注記８には、『頓悟眞宗論』と本書についての注目すべき指摘をされている。それを要約すれば、次の５點になろう。

1．『頓悟眞宗論』は『頓悟眞宗要決』、『大乘無生方便門』、『觀心論』、『楞伽師資記』などの資料を引用し再編集した僞託の文獻であること。
2．それに先行する資料には、新たに唐の玄宗皇帝の『御注金剛般若經』（＝西口芳男氏が指摘された『挾注金剛般若經（假題）』に相當するもの）と本書の２種を加えることができる。
3．『御注金剛般若經』は開元23年（735）に成立したものであるから、『頓悟眞宗論』の成立はそれより以降でなければならない。
4．『頓悟眞宗論』の第６～15段（田中良昭氏による分段）の内容と本書の該當部分の内容が完全に一致する。『頓悟眞宗論』のこの部分

の内容は、比較的に獨立性の強いものであるのに對して、本書の内容は、その前後と深くかかわって構成されていることから、『頓悟眞宗論』が本書を引用したことになる。

5．本書には、上圖 138V と編目された異本が存在する。

近年、こうした先學の研究成果を踏まえながら、程正氏が「『大乘開心顯性頓悟眞宗論』の依據文獻について―特に『大乘起世論』との關連を中心に」と題する論文を發表し、本書こそが『頓悟眞宗論』の最大の資料源となったものであることを論證したのである。

15. 大乘五方便北宗（大乘無生方便門、北宗五方便門、通一切經要義集）

①S182　②S735　③S1002　④S2503　⑤S7961　⑥P2058　⑦P2270
⑧P2836　⑨生 24

〔テキストの飜刻・校定〕

④－3『大正藏』卷 85 古逸部 ,1932,pp.1273b-1278a ―㊤1

④－2『大正藏』卷 85 古逸部 ,1932,pp.1291c-1293a ―㊤2

⑥⑦－1⑦－2 久野芳隆「流動性に富む唐代の禪宗典籍―燉煌出土本に於ける南禪北宗の代表的作品―」（『宗教研究』新 14-1,1937,pp.123-136）―㊅1

④－3『宇井禪宗史』（pp.449-467）―㊇1

④－1⑤⑥－1⑥－2『宇井禪宗史』（pp.468-510）―㊇2

④－2『宇井禪宗史』（pp.511-515）―㊇3

⑥⑦－1⑦－2 久野芳隆「北宗禪―燉煌本發見によりて明瞭となれる神秀の思想―（『大正大學學報』30,31 合輯 ,1940,pp.150-164）―㊅2

④－2〈大拙〉3（pp.161-167）―㊉1

④－3〈大拙〉3（pp.157-189）―㊉2

⑥⑦－1〈大拙〉3（pp.190-212）―㊉3

⑦－2〈大拙〉3（pp.213-220）―㊉4

④－1〈大拙〉3（pp.220-235）―㊉5

①④－2 伊吹敦「「大乘五方便」の諸本について―文獻の變遷に見る北宗思想の展開」（『南都佛教』65,1991,pp.96-102）

②④－3⑨㊉2 黄青萍「附録四　『大乘無生方便門』」（『敦煌北宗文本的價値及其禪法―禪籍的歷史性與文本性』（臺灣師範大學國文學系博士論文,2007,pp.401-418）

①④－2㊉1 黄青萍「附録五　『通一切經要義集』」（『敦煌北宗文本的價値及其

禪法―禪籍的歷史性與文本性』(臺灣師範大學國文學系博士論文 ,2007,pp.419-432)

④－１⑥⑦－１㊉３㊉４黄青萍「附録六　『大乘五方便北宗』」(『敦煌北宗文本的價値及其禪法―禪籍的歷史性與文本性』(臺灣師範大學國文學系博士論文 ,2007,pp.433-464)

⑦－２㊉３黄青萍「附録七　『大乘五方便北宗』之 P.2270(2)」(『敦煌北宗文本的價値及其禪法―禪籍的歷史性與文本性』(臺灣師範大學國文學系博士論文 ,2007,pp.465-475)

⑧黄青萍「附録八　『諸經要鈔』(P.2836)」(『敦煌北宗文本的價値及其禪法―禪籍的歷史性與文本性』(臺灣師範大學國文學系博士論文 ,2007,pp.476-479)

③黄青萍「附録九　『無題』(S.1002)」(『敦煌北宗文本的價値及其禪法―禪籍的歷史性與文本性』(臺灣師範大學國文學系博士論文 ,2007,pp.480-482)

〔著書・論文〕

久野芳隆「流動性に富む唐代の禪宗典籍―燉煌出土本に於ける南禪北宗の代表的作品―」(『宗教研究』新 14-1,1937,pp.117-144)

宇井伯壽「北宗禪の人々と教説㈡」(『佛教研究』2-4,1938,pp.34-69) →『宇井禪宗史』(pp.344-374)

宇井伯壽「北宗殘簡　６大乘無生方便門、７大乘五方便北宗、８無題、９無題　附讃禪門詩」(『宇井禪宗史』pp.424-427)

久野芳隆「北宗禪―燉煌本發見によりて明瞭となれる神秀の思想―」(『大正大學學報』30,31 合輯 ,1940,pp. 131-178)

增永靈鳳「大乘無生方便門の研究」(『印佛研』3-2,1955,pp.309-312)

關口眞大「神秀の大乘五方便」(『禪宗思想史』pp.102-108)

鈴木大拙「慧能示寂直後の禪思想１」(〈大拙〉3,1968,pp.5-40)

武田忠「大乘五方便の諸本の成立について」(『印佛研』19-1,1970,pp.262-266)

土屋明智「大乘無生方便門の研究」(『駒大大學院年報』22,1989,pp.49-53)

土屋明智「東山法門と「大乘無生方便門」」(『宗學研究』31,1989,pp.256-259)

土屋明智「『大乘無生方便門』をめぐって」(『駒大大學院年報』23,1990,pp.27-34)

土屋明智「初期禪宗における「大乘無生方便門」の役割り」(『駒大佛教學部論集』21,1990,pp.371-379)

伊吹敦「「大乘五方便」の諸本について―『通一切經要義集』を中心に」(『宗教研究』287,1991,pp.192-193)

伊吹敦「「大乘五方便」の諸本について―文獻の變遷に見る北宗思想の展開」

（『南都佛教』65, 1991, pp.71-102）

河合泰弘「『大乘無生方便門』の諸本成立について」（『駒大大學院年報』24, 1991, pp.83-92）

河合泰弘「北宗禪と五方便」（『宗學研究』34, 1992, pp.260-265）

河合泰弘「『五方便』の成立と北宗禪」（『駒大大學院年報』25, 1992, pp.45-53）

河合泰弘「「北宗五方便」と神會」（『宗學研究』35, 1993, pp.219-224）

河合泰弘「「北宗五方便」とその周邊」（『駒大佛教學部論集』24, 1993, pp.261-278）

餘威德「藉教悟宗的『五方便』」（『唐代北宗禪發展研究—以玉泉神秀爲中心』, 慈濟大學宗教與文化研究所碩士論文, 2004, pp.105-112）

中鉢雅量「北宗「五方便」と神會「五更轉」—唐代前期禪宗の民衆教化」（『東方宗教』106, 2005, pp.35-54）

干田たくま「戒概念の變化から考察した初期禪宗の頓悟思想—心地無相戒成立前夜—」（『禪學研究』85, 2007, pp.95-117）

黄青萍「「五方便門」寫本與〈大乘北宗論〉」（『敦煌北宗文本的價値及其禪法—禪籍的歷史性與文本性』臺灣師範大學國文學系博士論文, 2007, pp.108-112）

黄青萍「北宗禪之一　五方便門及其看心法的發展」（『敦煌北宗文本的價値及其禪法—禪籍的歷史性與文本性』（臺灣師範大學國文學系博士論文, 2007, pp.277-313）

John R. McRae「禪問答への八正道—初期禪に現れる機縁問答の兆し」（『東アジア佛教研究』6, 2008, pp.21-41）

〔略記〕

本書は『大乘起信論』、『法華經』、『維摩經』、『思益經』、『華嚴經』の一論四經に基き、問答體で北宗禪の要諦を5項目にわたって詳述した長篇の北宗禪綱要書である。北宗禪の内容については、古くは圭峰宗密の『禪源諸詮集都序』や『禪門師資承襲圖』等によって、間接的にその概要を窺うにすきず、しかも北宗禪が早く衰退し、中唐以後は南宗禪が隆盛となり、南宗禪の代表的文獻とされる『六祖壇經』や神會の主張によって、北宗禪を傍系として輕視する風潮が支配的であったことは否定できない事實である。

ところで、20世紀初頭の敦煌文獻の出現は、多くの北宗の禪文獻を學界に紹介し、初期禪宗史の研究に一時期を劃する契機となった。すなわち北宗禪の燈史である『楞伽師資記』や『傳法寶紀』が、史書としての根本資料とするならば、本書は、『觀心論』と共に北宗禪の思想、教説を示す根本資料というべきものである。これらの新資料を最初に紹介し、それによって北宗禪の

研究に劃期的な業績を殘されたのが、久野芳隆氏と宇井伯壽氏である。

本書が最初に紹介されたのは、矢吹慶輝氏が大英博物館で撮影し將來された寫眞によって、『大正藏』巻85の古逸部に收録されたもので、それには④－3と④－2が含まれている。この寫本④のS2503は、かなり複雜な形態を有しており、全28紙623行からなる長篇の巻子本であるが、その紙質は、首部9紙が非常に薄い白っぽい紙で、第10紙よりやや厚みを増して罫入りとなり、更に第13紙からは茶色っぽくなって罫がなくなり、折り目がつくといった具合である。

紙質ばかりではない。内容の方も、首部を缺いた第1紙より第15紙7行目までで一旦擱筆して以下25.5cmの餘白があり、この部分が④－1で、『宇井禪宗史』第8「北宗殘簡」の「第8篇　乙　無題」、すなわち㊀2の下の部分、及び後に出版された〈大拙〉3の第4號本、すなわち㊁5に相當する。次に第16紙から第18紙までが④－2で、末尾に「讃禪門詩一首」として、七言四句の詩と、その後に「丁卯（かのとう）年二月廿三日沙彌明慧記」という奥付があり、『大正藏』巻85の㊇2では「讃禪門詩」の首題を新加して收録している。しかしこの首題の新加は、宇井氏も指摘する通り明らかな誤りで、「讃禪門詩」自體は巻末の僅か七言四句にすぎず、それ以外は本書の一異本である。この部分は『宇井禪宗史』の「第9篇　無題」、すなわち㊀3と、〈大拙〉3の第1號本、すなわち㊁1に相當する。最後に第19紙以下第28紙までは、『大乘無生方便門』の首題で始まる部分で、尾部は斷缺しているが、これが④－3であり、『大正藏』巻85では、『大乘無生方便門』の標題で收録され、『宇井禪宗史』の「第6篇　大乘無生方便門」、すなわち㊀1と、〈大拙〉3の第2號本、すなわち㊁2に相當する。

このように3つの部分からなり、しかも首尾共に缺く複雜な寫本であって、ジャイルズ（Lionel　Giles）氏は、その目録で④－3と④－1が接續するようにみているが、内容的には同一でも、接續の點には問題があり、更に氏は丁卯年を「607年?」として、④を600年頃の寫本とみているが、北宗禪の文獻がその祖とされる神秀（606?-706）の出世以前に書寫されることはあり得ないことである。因みに宇井氏は、この丁卯年を宣宗の大中元年（847）と推定され、一方鈴木氏は787年（德宗の貞元3年）とみており、上山大峻氏は907年を妥當としている。

以上の如くスタイン本では、まず最初に④が『大正藏』並に宇井氏によって紹介されたのであるが、一方ペリオ本中に2種の存在をパリで發見された

久野氏が、『宇井禪宗史』の刊行に先立つ２年前の1937年、『宗教研究』新14－１に「流動性に富む唐代の禪宗典籍―燉煌出土本に於ける南禪北宗の代表的作品―」と題する論文、すなわち㊅１を發表され、卷末に「北宗の代表作『大乘五方便北宗』南禪の一作品『絶觀論』の原文を、二本或は三本對照して紹介する」として、本書と『絶觀論』の本文を紹介された。

ところで、本書については、上記論文で⑥のP2058と⑦のP2270の２本を別々に紹介されたが、⑥は首部約３分の１で中斷するものであり、⑦は首尾完全なものである。宇井氏はこの久野氏の撮影將來された⑥と⑦の寫眞によって、『宇井禪宗史』第８「北宗殘簡」の「第７篇　甲　大乘五方便北宗」、すなわち㊇２の上の部分にこれを掲げ、その下に④－１の「第８篇　乙　無題」を對照して兩者の校定をされている。從って、㊇２は兩者が共通する部分以外は、上が久野氏撮影將來のペリオ本の⑥と⑦、下が矢吹氏撮影將來のスタイン本の④－１ということになる。更に鈴木氏は、〈大拙〉３において、⑦を前半の⑦－１と後半の⑦－２とに分け、後者を前者の異本とみて別出し、⑥と⑦－１を第３號本第１部、すなわち㊉３とし、⑦－２を第３號本第２部、すなわち㊉４としてその本文を校訂された。

この間にあって、久野氏は前記論文㊅１が1936年滯佛中の執筆であったこともあり、あらためて歸國後の1940年に、『大正大學學報』30,31合輯に、「北宗禪―燉煌本發見によりて明瞭となれる神秀の思想―」と題して、北宗禪を總合的に研究した論文㊅２を發表され、再度㊅１と同じ本書の本文紹介をされている。

以上、久野氏によるペリオの２本の發見と紹介、宇井氏によるスタインの１本の紹介と、それらを總合した宇井、鈴木兩氏による業績を概觀してきた。從來本書に關しては３本６種の異本の存在が確認されていたが、その後の敦煌文獻に對する調査の進展によって、更に本書の異本數種の存在することが知られるに至った。

その第１は、『柳田史書』の卷末に付された「敦煌・禪宗關係資料一覽」によって知られた②のS735、第２は、北京商務印書館編『敦煌遺書總目索引』に收録された「敦煌石室經卷中未入藏經論著述目録」の1295によって知られた⑧の北京本生24、第３は、田中氏が東洋文庫での調査で知った③のS1002、第４は、田中氏が昭和47年（1972）６月に大英博物館の書庫で、スタイン將來の未整理文獻を調査した際に發見し、「イギリス・フランス留學記」（『駒大佛教論集』3,1972,pp.156-164→『田中敦煌』2,pp.545-557）にその存在を報告し

た⑤のS7961であり、第5は、伊吹敦氏の紹介による①のS182である。しかも後の3種はいずれも斷卷に過ぎず、やはり本書の中心は久野、宇井兩氏の紹介になるものである。

特に本書は、異本相互の間に極めて出入の多いことが特色であり、從って宇井氏、鈴木氏共に、本文紹介に當っては、その内の一本を底本として他を對校するという方法をとらず、各々別個に掲載しているのであって、この點からしても本書の成立、傳承に際しては、かなりの曲折のあったことが窺われる。鈴木氏はそうした各異本の成立の前後關係についても考察の手を加えているが、それをふまえて武田忠氏が、「大乘五方便の諸本の成立について」と題する論文を發表されたのも、本書のこうした特徴を如實に示すものである。

こうした從來の研究は、1990年頃より新たな展開を見せた。

まず、土屋明智氏は「『大乘無生方便門』をめぐって」（『駒大大學院年報』23,1990）と題した論文において、本書と神會の『壇語』との類似性に注目し、こうした兩者に見られる一致が他の北宗禪の文獻との間には見られないものであるとし、さらにこの一致は「神會が北宗禪、とりわけ『大乘無生方便門』の内容を批判したという以前に、神會の思想の枠組が『大乘無生方便門』を踏襲しているということである」と指摘された。

一方、伊吹敦氏は、「「大乘五方便」の諸本について―文獻の變遷に見る北宗思想の展開」（『南都佛教』65,1991）と題した論文を發表し、本書の異本として新たに①の『通一切經要義集』と題する一本を紹介した上で、從來知られた本書の諸本を綜合的に整理し、それら諸本の相互關係の解明に努め、そこに窺われる北宗禪の思想的展開を論究されたのである。その結果、本書の思想の大綱は、すでに神秀に存在したが、それが完成されたのは普寂においてであろうとした上で、本書の諸本を6つに分類することができるとする。具體的には、第1類（②、④－3、⑨）（『大乘無生方便門』）が最も古く、これが第2類（④－1）・第3類（⑥、⑦）（『大乘五方便北宗』）の系統と、第4類（①）（『通一切經要義集』）・第5類（④－2、第4類の節略本）の系統との2つの系統に分かれて展開を遂げたと推定され、さらにこうした展開が思想的變化に基づくものであったことを指摘されたのである。因みに、伊吹氏の分類では、第6類は③の1種のみで、しかも標題未詳という。ただし、伊吹氏の場合、⑧については、「この文獻は、「五門」という構成を前提としてはいないという意味で、「大乘五方便」の一異本と認めることは無理であろう

と思われる」とし、⑧のP2836を本書のテキストから除外すべきだという見解を示された。

次に、こうした本書のテキストを6種に分類できるとする伊吹説に對して、河合泰弘氏が「「北宗五方便」とその周邊」(『駒大佛教學部論集』24,1993)と題する論文を發表し、異見を呈された。すなわち、河合氏は「五方便」は北宗、特に普寂系統の特色と捉えることができるとし、本書のテキストの系統については細かくは8つの系統に、大まかには3つの系統に分類することができるといい、さらに本書は、南宗、特に神會の思想に大きな影響を與えたとの分析をされたのである。

また、中鉢雅量氏は、「北宗「五方便」と神會「五更轉」—唐代前期禪宗の民衆教化」(『東方宗教』106,2005) と題した論文において、北宗禪の主要な思想を傳える本書と神會或いはその一派の人びとに歸せられた「五更轉」との關係に注目し、兩者はほぼ同じ時代に作成され、いずれも「唐代前期禪宗の民衆教化」に際して用いられたものであると推定された。

最後に、黄青萍氏は『敦煌北宗文本的價値及其禪法—禪籍的歴史性與文本性』(2007) と題する學位論文において、「北宗禪之一　五方便門及其看心法的發展」と題した章節を設け、かつて河合泰弘氏によってなされた本書の諸本に對する8つの分類方法に異議を呈し、新たに6つの系統とすべきであると主張した。すなわち、河合氏は①と④－2とに、④－1と⑥、⑦－1とにそれぞれ分けたのであるが、黄氏によれば、④－2が①の摘要本であることからして、兩者は別系統のものではなく、同じ系統に屬する2種の異本であるとし、「①→④－2」という表記で兩者の關係を表した。同じ理由で、黄氏は本書の「大乘五方便北宗」系統の諸本の關係を「④－1→⑦－1→⑥」というふうに表記したのである。その結果、本書の系統は、河合氏のいう8つではなく、6つに分類されるべきであるという。こうした黄氏による分類に、前述の伊吹氏、河合氏の兩説を加えて表記すれば、以下の通りである。すなわち、

分類	伊吹敦説	河合泰弘説	黄青萍説
1	S735,S2503(3), 生24	S735V,S2503(3),S7961, 生24V	S2503(3)→S735V→生24V
2	S2503(1)	S2503(1)	S2503(1)→P2270(1)→P2058
3	P2058,P2270	P2058,P2270(1)	S182→S2503(2)

4	S182	S182	P2270 (2)
5	S2503 (2)	S2503 (2)	S1002
6	S1002	P2270 (2)	P2836
7		S1002	
8		P2836	

ただし、黄青萍は⑤のS7961については、圖版未見のため、その分類を未詳とされている。

また、前述の通り、本書のテキストの分類については、河合泰弘氏は、細かくすれば８つに、大まかにすれば３つの系統にそれぞれ分類することができるとして、表で示した８つの系統のうち、６、７、８の３種は、「五方便」の體裁を整えておらず、殘りの１から５の５種はさらに３種に分類することが可能であるとされる。すなわち、

一、上記分類の１

二、上記分類の２と３

三、上記分類の４と５

の３種である。

16. 大乘心行論

① P3559

〔テキストの飜刻・校定〕

①冉雲華「敦煌文獻與僧稠的禪法」（『華岡佛學學報』6, 1983, pp.96-100）→同氏『中國禪學研究論集』（臺灣, 東初出版社, 1990 初版, pp.54-89）

①沖本克己「僧稠について―初期禪宗史をめぐる一視點」（平川彰編『佛教研究の諸問題　佛教學創刊十周年記念特輯』山喜房佛書林, 1987, pp.94-96）→同氏『禪思想形成史の研究』〈花園大學國際禪研究所研究報告〉5（1998, pp.40-43）

〔著書・論文〕

柳田聖山「傳法寶紀とその作者―ペリオ 3559 號文書をめぐる北宗禪研究資料の札記、その１―」（『禪學研究』53, 1963, pp.45-71）→〈柳田〉1（pp.188-223）

篠原壽雄「『大乘心行論』」（『敦煌佛典と禪』, pp.172-174）

Jan yun-hua, 'Sengchou's Method of *Dhyana*' Whalen Lai and Lewis R.

Lancaster, ed,: "*Early Ch'an in China and Tibet*" BERKELEY BUDDHIST STUDIES No.5, co-edited by Whalen Lai and Lewis R. Lancaster, Asian Humanities Press, Berkeley,California, 1983, pp.51-63.

冉雲華「敦煌文獻與僧稠的禪法」（『華岡佛學學報』6, 1983, pp.73-103）→同氏『中國禪學研究論集』（臺灣, 東初出版社, 1990 初版, pp.54-89）

沖本克己「僧稠について―初期禪宗史をめぐる一視點」（平川彰編『佛教研究の諸問題　佛教學創刊十周年記念特輯』山喜房佛書林, 1987, pp.75-96）→同氏『禪思想形成史の研究』〈花園大學國際禪研究所研究報告〉5（1998, pp.19-45）

黄青萍「敦煌出土『修心要論』連寫本文獻研究史略及其意義」（印順文教基金會 95〈2006〉年度「論文獎學金」受賞論文）

〔略記〕

本書は標題の下に「稠禪師」という著者名らしきものがあるが、もとより稠禪師自身の著作かどうかは疑問視されており、他の稠禪師作とされるものと同様、稠禪師に假託されたものとみられている。稠禪師すなわち僧稠（480-560）は、達摩と同じ頃、河北で神異（しんい）による獨特の禪風を擧揚し、達摩と並び稱せられていたことが、道宣の『續高僧傳』の習禪篇の總論によって知られているが、彼の禪法そのものはむしろ小乘的なものであって、大乘の立場に立つ本書が、稠禪師自身のものであるということはありえない、というのが柳田聖山氏の説である。

ところで、本書の内容はかなり複雜なものであるが、その中心的立場は、『華嚴經』の三界唯心に立って、一切はこの一心に基づくという一多相即を述べ、心性清淨の立場から六波羅蜜や十善業の實踐行に新たな意味づけをなし、守心を本と爲すべきことを説く等、極めて大乘的色彩の強いものである。『維摩經』と初期禪宗との密接な關係は、かねてから指摘されるところであるが、特に本書が守心を説き、華嚴の立場を強調するところは、華嚴禪の傾向の強い北宗禪系のものであることを示し、また北宗禪の中心思想というべき「大乘五方便」の第四門は、『思益經』に基いて諸法の正性を明らかにするものであるが、本書が『維摩經』『華嚴經』と共に、『思益經』を重視している點も、本書が北宗系のものであることを物語るといえよう。

なお、本書の内容に關しては、篠原壽雄氏が「『大乘心行論』」（『敦煌佛典と禪』）と題した項目の中で、「大乘的な看心を中心とする禪法に、各種の思想や教義を總合した北宗禪の特色を示すもの」との位置づけをされたのに對

して、冉雲華氏が「敦煌文獻與僧稠的禪法」（『華岡佛學學報』6,1983）と題した論文で、神會の提起した滑臺の論戰以前には北宗、南宗という分け方が確立されていなかったことから、本書を「北宗禪語録」とすべきではないとしつつ、僧稠を本書の作者とする説にも疑義を呈された。

一方、沖本氏は「僧稠について―初期禪宗史をめぐる一視點」（平川彰編『佛教研究の諸問題　佛教學創刊十周年記念特輯』山喜房佛書林,1987）と題した論文で、「心外無法」で始まる本書が、用語用法の上で『稠禪師意』に共通することは一目瞭然だとし、本書を僧稠に歸し得るとされた。さらに本書に見られる「看心」、「守心」、「意不起」などの術語のいずれもが北宗禪の特色とされていることからして、こうした「攝心」、「看心」、「守心」などの術語を用いる素朴唯心論の立場がまず僧稠によって示され、それが東山法門および北宗禪に影響を與えたのではないか、との推定をされた。

本書の唯一の資料である①は、『傳法寶紀』をはじめ北宗系諸文獻を總集したものであるが、その中に本書が書寫されていることも、そうした本書の特性を示すものであろう。

17. 大乘北宗論

① S2581

〔テキストの飜刻・校定〕

①『大正藏』巻85古逸部1932,p1281c-1282a―㊦

①㊦『宇井禪宗史』（pp.447-448）

①饒宗頤「神會門下摩訶衍之入藏兼論禪門南北宗之調和問題」圖版（『香港大學五十週年記念論文集』1,1964,pp.173-185）→饒宗頤『選堂集林・史林』（中華書局香港分局,1982）→『饒宗頤二十世紀學術論文集』8（臺北,新文豐出版股份有限公司,2003,pp.86-101）

〔著書・論文〕

宇井伯壽「北宗殘簡　5大乘北宗論」（『宇井禪宗史』p.424）

饒宗頤「神會門下摩訶衍之入藏　兼論禪門南北宗之調和問題」（『香港大學五十週年記念論文集』1,1964,pp.173-185）→饒宗頤『選堂集林・史林』（中華書局香港分局,1982）→『饒宗頤二十世紀學術論文集』8（臺北,新文豐出版股份有限公司,2003,pp.86-101）

中田萬善「敦煌出土文獻「大乘北宗論」及び「觀心論」について―1―」(『宗學研究』10,1968.3,pp.86-91)

黄青萍「「五方便門」寫本與〈大乘北宗論〉」(『敦煌北宗文本的價値及其禪法―禪籍的歴史性與文本性』臺灣師範大學國文學系博士論文,2007,pp.108-112)

〔略記〕

本書は矢吹慶輝氏撮影将來の寫眞により、1932年に①が『大正藏』巻85古逸部に收録され、更に1939年、宇井伯壽氏がその著『宇井禪宗史』第8「北宗殘簡」の第5篇に、①と『大正藏』本とを校定して再録紹介されたものである。宇井氏はその解説において、本書を「極めて簡單な文で而も同一趣意が繰返されて居るが、最重要な點は偈の第三句に心を忘ずとある所に存する」と述べ、北宗の忘心の主張に注目すべきを説かれている。而してその最後に、「此論の最後に大乘有十也とある一句は其意味が明瞭で無い」と述べているが、この「大乘有十也」の「也」の字は、原寫本では「地」であり、㊦及び宇井氏が共にこれを「也」と讀んだのははなはだ疑問である。そしてこの最後の「大乘有十地」の一句は、改行してそれに續く「少（＝小）乘有七地」以下、小乘大乘の修道の階位について述べた10行（但し最後の3行は細字）に接續すべきもので、恐らくその前までが『大乘北宗論』に屬するものであろう。

すなわち本書は、その標題の下に「大乘心」とあるように、大乘心についてこれを「我尚不起布施心、何況慳貪心」の如き一定の形式を持って説示したものであり、宇井氏が第二句といわれるのは、その後に「而重説偈」として「憂從心憂、樂從心樂、若忘於心、何憂何樂」とある四句中の第三句を指す。なお傍線を付した「忘」は原本では「妄」とあって、それを宇井氏が改められたものであり、また「何」は、宇井氏は原本には「可」とあるといわれるが、實際は「何」である。

その後再び「有文有字、名曰生死、無文無字、名曰涅槃」の如き一定の形式でもって13句を連ね、生死と涅槃を對比して説示している。從って内容的には、とりたててこれが北宗の主張を述べたものという特色は見出せず、あえて求めるとすれば、やはり宇井氏が提起された偈の中の「忘心」に注目すべきであろう。

その後本書に關する論文は、1964年の饒宗頤氏のものまで待たねばならないが、饒氏はその論文に加えて、S4286の『大乘開心顯性頓悟眞宗論』、S1494の『臥輪禪師看心法』等と共に、本書の寫眞を資料として掲載し、神

會が大乘禪定を論じて不用心、不看靜、不觀空、不住心等というが、それが實は北宗にも同様の説法があるという例證として、本書の四句の偈までの前半の部分を引用されている。そして本書の説く「北宗的大乘心」と「南宗的最上乘」とは結局別のものではない、という饒氏の南北宗調和説の論據とされているのである。

このように、本書は先の『大乘開心顯性頓悟眞宗論』の略記で述べたと同様に、大乘頓悟を主張する北宗禪の一資料とみることができると考えられる。

18. 達摩禪師論

①橋本凝胤氏舊藏本

〔テキストの飜刻・校定〕

①『關口達摩大師』首部圖版

①『關口達摩大師』(pp.445-450) →『關口達摩大師』(改) (pp.463-468)

〔著書・論文〕

關口眞大「『達摩禪師論』と達摩大師」(『關口達摩大師』pp.49-81)

關口眞大「新資料「達摩禪師論」(燉煌出土) について」(『印佛研』6-2, 1958, pp.106-107)

中川孝「達摩禪師論 (敦煌出土) 考」(『東洋學』2, 1959, pp.85-96)

中川孝「敦煌出土達摩禪師論に就いて」(『印佛研』8-1, 1960, pp.264-267)

鈴木哲雄「四祖道信の禪風」(『宗學研究』10, 1968, pp.100-106)

田中良昭「菩提達摩に關する敦煌寫本三種について」(『駒大佛教紀要』31, 1973, pp.161-179) →『田中敦煌』(pp.193-195)

〔略記〕

本書はかつて奈良藥師寺長老の橋本凝胤氏が舊藏された敦煌本であり、他に異本もなく、現に日本にその原本が保存されている敦煌文獻として、その資料的價値の高いものである。これを廣く學界に紹介されたのが關口眞大氏であり、1957年に出版された『關口達摩大師』は、關口氏自身がその序言の冒頭に、「本研究は、稀覯の新資料である敦煌出土『達摩禪師論』一卷の解説を中心として、廣く禪觀思想史全般の上から、達摩大師の思想の解明を試みたものである」と述べているように、本書の紹介と解説を中心とした達摩論

の總合的研究として上梓されたものである。

従って、その首部には原寫本の寫眞を、巻末附篇にはその本文の校訂を掲げるとともに、本論でも、本書の構成と特色について、それを現在達摩の唯一の眞説とされる『二入四行論』と對比しつつ詳細な論究をされている。ただ本書が首部を缺いていることははなはだ惜しまれることであるが、その末尾には「開耀元年六月普仁寺主道善受持日宣」という奥付があり、開耀元年(681) は唐の高宗の代であり、禪宗では五祖弘忍の示寂後僅かに6年、神秀76歳、慧能44歳の年にあたる。もしこの奥付が本來存在したものであるならば、達摩論の中では最も古い成立になるものとして更に一段と價値を高めるものであるが、關口氏自身もこの奥付には、筆勢、位置、文字の大きさ、墨色等について疑義を挾まれ、單に「唐代の古寫本」というに止めている。

しかし、その内容の面からは、一面『二入四行論』との共通點を擧げて、これが達摩の眞説とすることも可能であるという立場と、四祖道信の守一不移の坐禪看心や、五祖弘忍の守本眞心との共通點から、達摩大師の説法そのままではなく、その假託であったとしても、弘忍時代以後のものではなく、少なくとも神秀、慧能以前のものに屬するという立場の二面を擧げ、結論的には『二入四行論』と同一次元に本書を位置づけようとされている。

これに對して中川孝氏は、「本論は思想用語文體上、達摩の二入四行論と一致せず、むしろ、四祖及び五祖には全面的に一致する。故に本論は恐らく五祖の門人が四祖並びに五祖の思想を綜合して記述したものと考えられる」と述べ、柳田聖山氏も『柳田史書』で、本書を「恐らく東山法門の綱要書の如くである」と述べられている。

田中良昭氏も先に敦煌出土P2039の『天竹國菩提達摩禪師論』を紹介した際、本書の中に650年をそれほど遡らない成立とされる僞作の『法句經』の引用のあることや「頓生淨土」の立場の主張のあること等からして、本書を、達摩よりも四祖道信、五祖弘忍の思想禪風と同一次元においてとらえるべきことを述べている。

従って本書は、東山法門の立場に立つ達摩論の一種とみるのが妥當と考えられる。

なお、鈴木哲雄氏が「四祖道信の禪風」((『宗學研究』10,1968) と題した論文では、本書に關説し、奥書にある「開耀元年六月」という紀年が實際に存在しないことを指摘された。